

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	任 穎
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 江戸時代における詠物詩の比較研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	佐藤 利行
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	河西 英通
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	中山 富廣
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	李 均洋
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>「詠物詩」とは、中国六朝時代を中心に、主として文人のサロンにおいて、自然物や人工物などを取り上げ、それを主題として文人らが作詩して、その優劣を競うという遊戯的色彩の強い内容のものである。</p> <p>本論文は、日本漢詩における詠物詩を取り上げ、中国漢詩の影響などを考察しつつ、特に江戸時代の詠物詩の特徴の解明を試みたものである。論文は、第一章「序論」、第二章「日本漢詩における詠物詩の歴史」、第三章「江戸前期と江戸中期の詠物詩」、第四章「江戸後期の詠物詩」、第五章「江戸期における詠物詩の変遷」、第六章「結論」の全六章から構成されている。</p> <p>第一章では、本研究の動機・目的を論じ、中国・日本における先行研究について分析した上で、本研究の意義、研究の方法について述べる。</p> <p>第二章では、我が国最古の漢詩集である『懐風藻』を取り上げ、すでにその中にも物を詠ずる詩が見られるが、その多くは中国六朝期、初唐期の作品を典拠とするもので、いわば中国の詠物詩の模倣的な詩であることを指摘する。後の『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』には、従来の梅を題材とする詩が多く詠まれたものの他に、桜や魚を詠う詩など、詩の題材としての対象が多彩になり、表現面でも単なる中国詩の模倣から脱却し、独自の表現を試みようという作品も見られるようになったことを述べる。</p> <p>五山文学における詠物詩については、義堂周信、絶海中津、虎関師錬らの作品を取り上げて考察する。五山の僧侶は多くの詠物詩を詠んでおり、そこには盛唐詩の影響が色濃く見られることを指摘する。その詩は典拠を踏まえ、格調の美しさを求めるばかりに、対象物についての観察が疎かになっているが、その内容は後世の日本漢詩に大きな影響を与えていることを論述する。</p> <p>第三章では、林羅山、石川丈山、伊藤仁斎、新井白石らの詠物詩を中心に考察する。林羅山の詠物詩には、五山文学の影響を受けながらも自分なりの新たな時代感を詩に表現しようとする努力を見ることができる。羅山の友人である石川丈山の詠物詩では、桜・牡丹を詠うものが多く見られるが、そこにも盛唐詩の影響を見て取ることができる。伊藤仁斎の詠物詩には、花見の名所を訪ねて桜を詠うものが多くみられ、当時の文人趣味の一つとして花見見物をして詩を詠ずるということがあったことが推測される。新井白石の牡丹を詠ずる詩には、当時は盛唐詩を典拠として牡丹を詠ずる詩が多くある中で、その流行に変化を加えようとした姿勢が見られる。白石の友人である祇園南海の詠梅詩には蘇軾の影響を認めることができることから、江戸中期にはすでに宋詩の影響が見られることも指摘する。</p> <p>第四章では、六如上人、菅茶山、市川寛斎、大窪詩仏、柏木如亭らを取り上げる。それぞれの詩人の詠物詩を丹念に分析し、その特徴を明らかにしている。中でも六如が用いた「花神」という詩語に関する分析、すなわち朱熹や劉克莊ら宋詩に見られる「花神」とは、花を咲かせる神という意味であるのに対し、六如のそれはより具現化され人間に近い存在として用いられていることを解明した。</p>			

第五章では、第三章・第四章で考察した江戸期の詠物詩について、それぞれの時期における特徴とその流れをまとめる。

第六章では、各章の考察によって得られた内容をまとめた上で、研究の過程で明らかになった問題点・課題について述べる。

以上、述べたように、本論文は日本漢詩の中から「詠物詩」を取り上げ、それを丹念に読解し、中国詩との比較の視点から江戸期の詠物詩の特徴を明らかにしたもので、これまで個別の詠物詩研究が多くあった中で、総合的に詠物詩を研究したものとして高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)